



Title	保健管理センター分室だより : 竹深裕子氏講演「エイズ・性の悩みと避妊について」を学生はどう受けとめたか
Author(s)	石田, 香
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 15: 101-103
Issue Date	1994-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8615
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

竹澤裕子氏講演「エイズ・性の悩みと避妊について」 を学生はどう受けとめたか

石 田 香

《はじめに》

保健管理分室運営委員会は、「大学におけるエイズに関する教育」として昨年度に続き2回目の講演会を、1993年11月26日に開催した。

講師として札幌市北保健所助産婦の竹澤裕子氏を招いた。テーマは『エイズ・性の悩みと避妊について』である。

聴講学生は、教養科目「体育」の受講生、及び一般学生の計152名（男子86名、女子66名）であった。

今回は講演終了時に今後の活動方針を考える参考とするため感想カードの提出を求めた。

本稿では、感想カードの内容を要約分析し、学生が講演を契機に何を考え、何を求めているかをまとめて報告したい。

なお、本文中における（ ）の数字は、同じ内容の表明者の件数を示している。

〈男女の人間関係を改めて考える〉

講師は日頃の仕事でふれている実例（悲慘な男女関係となってしまった事例等）を一般的な批判など一切含まずに事実として問題提起した。

このことは、学生達が男女の人間関係で何が一番重要であるかを考える機会となった。

「自分の意志が大切」「女性として意見をもつことが一番大切（2）」「セックスに対する考えをしっかりとたなければ相手に迷惑」「お互いの同意もとの性交は否定しない」「避妊することや、妊娠してしまったことを真面目に話せることができれば否定しない」「病気がないか相手をよく知り、考えて行うべき」「避妊を言い出せない関係でなぜセックスが成り立つのか」「相手のこと、お互いのことを考えて行動していきたい（3）」

これらの意見から、男女の関係では双方の意志決定が重要であり、特に性交時にはお互いの意志の疎通が欠かせないと考えていることが分かる。

その意志の疎通を円滑に図るためには、お互いの意志や人権の尊重が不可欠である。

また、性交だけではなく避妊やエイズの予防などにも同じことが言えるが、性についての男女間コミュニケーションを確立するということは彼らの大切な性の課題となってきている。

今回のように実例を通しての現実的な話は、改めて男女の人間関係を各々に考える良い機会となったことは間違いない。

〈避妊の重要性を学ぶ〉

「避妊具を見たのは初めてで、使い方の実習は貴重な体験で必要なこと（19）」「避妊の重要性、大切さを認識した（9）」「詳しい具体的な避妊方法が分かり勉強になった（9）」「知らなかった新たな避妊の知識が分かった（3）」「避妊具を使用しても妊娠率が高いので驚いた（3）」「避妊しても妊娠を完全に防げないことが分かり、性交などについて考えさせられた（3）」

避妊に関する詳しい資料（各種避妊法についての妊娠率や失敗例及び人工妊娠中絶届出数など掲載）の配布や、避妊具の実物を見せたりという工夫された講演は、上記の感想から避妊に対する理解を深めるためには効果的だったといえる。また、学生は「性と避妊は切り離せない問題」「誰もが通る道で、大切なこと」などと、避妊の重要性を認識したことが分かる。現在、避妊具として知られているコンドーム使用は性感感染症予防としても注目されている。このことから避妊具の正しい使用法や、注意しなくては

いけないことなど、避妊については詳しい正確な知識の普及が必要である。しかし、学校教育の場では避妊に関する基礎理論は指導されても、詳しく扱われていない実状である。したがって学生達はこのような機会を利用したり、我々も保健室を学生達の相談を受けとめる場とすることも必要であろう。

なお、避妊は知識とともにお互いの意志が大切で、相互理解なしに避妊することは難しい。避妊においても人間関係が重要となる。

「避妊は男性がしっかりとした心構えをもたなければできない」(男性の意見)
「不必要な妊娠で女性の身体や一生を狂わせる権利は男性にない」(男性の意見)

これらの男性の意見は、避妊を通して男女間の相互性あるいは対等性について考えている。これは、男女間のコミュニケーションを確立する意味で期待できる意見である。

〈エイズの差別意識をなくすことが課題〉

「身近な問題、人間が避けられない性の問題(4)」「他人事だったが講演を聞き身近になった(5)」「外国の病気とと思っていたが、日本人もかかる病気と分かった」

というように講演を契機に、エイズは性感染症という誰にでも起こりうる病気であり、身近な問題と捕らえるようになった学生と、今なお自分に無関係な事と考えている学生がいる。

「エイズは自分に無関係な事、遠い存在である他人の問題(5)」

このように考えている学生は、自分の問題として考えられない程エイズは特別な病気と受けとめている可能性がある。この場合はエイズに対する理解が乏しいために、このような偏見を持っているとも言える。

「エイズの差別意識を、なくすことが課題(12)」「偏見を捨てる、偏見を持たない事

が大切(4)」「エイズの人と普通に接することのできる人間になりたい」「エイズとわかった時に今まで通りの付き合いができるか不安」「差別しないことは自分ではできないが、今後は考えるべき」「エイズは増えているので管理すべき」

多くの学生は「エイズの差別意識や偏見を社会からなくしたい」と考えている。しかし、感染する可能性が少しでもあるかもしれないと思う気持ちから、実際は避けようとする意識も否定しない学生もいる。日常生活では感染の危険がないにもかかわらず、疎外されるということはエイズ患者の人格を否定することにつながる。また、このことは「エイズ患者の普通の社会生活を認めない」という差別的態度ととらえることができる。

こうした感想が出てくるのは、エイズという性感染症は意志さえあれば防ぐことができるという事実を認識していないことによる。無知はエイズに関する偏見や差別を生むので、エイズに関する必要な知識や情報を提供することが引き続き求められる。

また、「エイズ以外にも弱者・障害者への偏見や根強い差別があるので解決は難しい」と学生達の意見にもあるが、差別や偏見はエイズだけの問題ではない。社会的弱者・障害者への差別、偏見などの問題解決なしに、エイズ患者への差別も解決されないだろう。

〈正確な知識、情報を得ることの大切さを知る〉

「知らなかったことや、分からなかったことが分かり勉強になった(14)」「間違った知識があったことが分かり、勉強になった(6)」「自分の知識の乏しさ、無知を自覚した(15)」「知っているつもりで知らないことが多いことに気づき驚いた(11)」

以上のように性に対する知識が乏しかったことを認めている学生は46名に及ぶ。

「命を守るために、あるいは望まない妊娠や性の悩みを減らすために、正しく知識を

得ることが必要で、知識を深く広げることが大切（13）

これらのことから、学生達は正しい知識を得ることの必要性を感じている一方、これまで誤った認識をしていたり、知っているつもりで知らなかったという現状がある。

このような現状をひき起こしているのは、第一に正確な知識を得る機会が少ないことと、第二に9名の学生も表記しているが、「世間に広まっている情報は信頼性がなくウソが多い」ということである。このことはテレビや雑誌などから得た断片的な情報で、自分は知っていると思込み、新しい情報に消極的になることも考えられる。故に、学生が正しい情報を得て知識を深く広げられるには、もっと積極的に正確な知識を得る機会を増やすべきであろう。分室としても講演形式に限らずいろいろな形式で彼らに正確な知識・情報を提供していきたい。

また、より早い時期に正しく深く知ることは選択力が育ち、当面する課題に対して自ら賢明

な意志決定や行動選択ができる主体育成に結びつくと考える。よって小学校の教員養成課程を設置する当大学では、学生達が性教育に係る内容を、体系的に学ぶことができる手立ても考える必要がある。

《おわりに》

全体の感想の中で14名の学生が、今後よく考えて責任のある行動をして行きたいと決意をあらたにしている。また、最初は恥ずかしさもあったが、性の問題を真剣に考えることができたという感想も多かった。その他にも性教育等の一般講座があると良いという意見や、この様な企画を一年に一度設けてほしいという要望もあった。

こうした学生の要望を積極的に受けとめ、分室としては学生が健康を守り続けることができる様に、講演だけにとどまらず、さらに活動を展開し充実させて行きたい。

（保健管理センター岩見沢分室 看護婦）